



た状態で放置されている小野寺公園（栃木市）の記念碑は見るに忍びない。

壬生町に接する思

川の左岸、「天皇駐

蹕之碑」の立つ場所

（栃木市柳原町）は、

明治三十二年の特別

大演習の終了後、兵

士の分列式や勅語の

下賜が行われた由緒ある地であるものの、記念碑が遺されているのみで、解説も設けられていない。ただ、周囲が太陽光発電のパネルに埋めつくされた記念碑の近くから東武鉄道宇都宮線を望む光景は（写真15）、なかなか写真映えする。困難を極める聖蹟探訪の旅における一服の涼と言えようか。

〔付記〕

一、本稿は、平成二十二年（2010）六月十日・同月十一日、

同月十八日・同月二十四日、二十八年五月十二日・同月十九日・七月十一日・同月十二日、八月二十七日・十二月十三日、

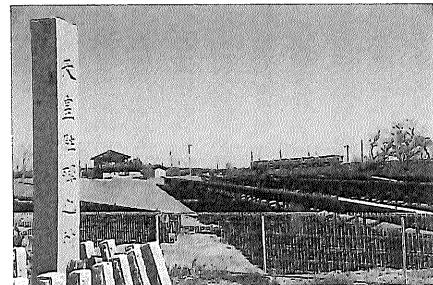


写真15（栃木市）「天皇駐蹕之所」碑から望む東武鉄道宇都宮線の電車

二十九年一月三十一日・三月二十四日、令和元年（2019）六月二十六日、二年三月六日・同月十二日・同月十三日・同月二十四日、三年十月二十八日、四年八月二十三日に実施した現地調査などに基づいて執筆したものである。

二、調査に際して、宇都宮市の栃木県立図書館、宇都宮市立中央図書館、日光市立日光図書館、日光二荒山神社の吉田健彦氏・福田直之氏、日光東照宮の山作良之氏・青山隆生氏、さくら市立氏家図書館、さくら市ミュージアム荒井寛方記念館、那須町立図書館、観光情報サイト「もう一つの那須 芦野」、高根沢町立阿久津中学校、栃木市の県立栃木高等学校、栃木市図書館などに協力を仰いだ。この場を借りて、厚く御礼申し上げる。

三、資料を翻刻・引用するに際して、以下の方針のもとに行つた。

1 原則として、旧字体や俗字は新字体に改めた。

2 仮名遣いは原文通りとした。

3 碑文を翻刻するに際しては原本のままとし、明らかな誤字・脱字については正しく改めた。

4 碑文を翻刻するに際しては原文のままとし、明らかな誤字・脱字については正しい表記に改めた。

5 刊本から史料を引用するに際して、明らかな誤字・脱字については正しい表記に改めた。

6 句読点が付されていない史料については、必要に応じて付した場合がある。

7 一文字以上の繰り返し記号（、、、）はそのまま表記したが、二文字以上の繰り返し記号（、、、々々）は文字に置き換えた。

8 判読不能の箇所は□で示した。

四、掲載した写真は、いずれも執筆者が撮影したものである。

赤十字「昭憲皇太后基金」創設一一〇年記念シンポジウム

代々木の杜で考える 平和・人道支援・SDGs

「昭憲皇太后基金」一一〇年の歩みを手がかりに

令和四年四月一日 於・明治神宮会館

赤十字「昭憲皇太后基金」創設百十年を記念したシンポジウム「代々木の杜で考える平和・人道支援・SDGs」を、四月二日（土）に明治神宮会館で開催した。会場とオンラインのハイブリッドで実施し、あわせて約二百名が参加した。

趣 目

世界では新型コロナウイルスの感染症がいまだ猛威をふるい、火山の噴火や地震等の災害も絶えない。度重なる紛争、地球温暖化などによる異常気象、国際的な支援・協力体制がさらに重要になっている。

平時に備える——。赤十字には、自然災害への備えや疾病予防等の平時活動を奨励するため、日本の提案により一九一二年（明治四十五）に設立された基金がある。

それが「昭憲皇太后基金」である。

同基金は、平時における世界最古の国際人道基金として、各国で広く知られている。

本シンポジウムでは、先人が築いた「昭憲皇太后基金」一一〇年の歩みを手がかりとして、世界における人道支援のはじまりから最前線の取り組みまで、幅広く活動をレポートする。今を生きる私たちは、この平時の国際支援をどのように発展させることができるのか。国内外で活躍の登壇者とともに、代々木の杜から世界に思いを馳せる。

第一部 講演

昭憲皇太后と赤十字の関わり ——日本赤十字社の所蔵史料からたどる——

大西智子

ここにちは、日本赤十字社（以下、日赤と略記）の本社一階の史料展示室、赤十字情報プラザの参考、大西智子と申します。本日は日赤所蔵資料を通じて昭憲皇太后のご事蹟を辿るという貴重な機会を頂き、光栄に存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

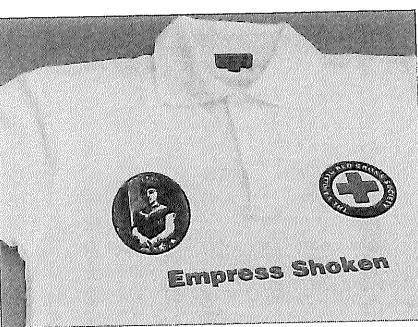


図1 パヌアツ共和国の青年のポロシャツ

早速ですが、こちらのポロシャツをご覧ください。（図1）パヌアツ共和国の青年らが、昭憲皇太后のお顔がプリントされたポロシャツを着ていました。彼らにこの方を知っているのかと訊ねると、全員から「Empress Shoken!」そして昭憲

皇太后基金が僕たちの活動を支えているのだと胸を張つて答えてくれました。今も世界のどこかに昭憲皇太后を誇らしげに語る若者がいると思うと温かな気持ちになります。

はじめに

昭憲皇太后と赤十字とのあゆみ

昭憲皇太后（美子さま）と赤十字との歩みを振り返ります（※実年齢でお話しますので、実録の記載から一歳上となります）。

美子さまが一八四九年の京都でお生まれになつたとき、赤十字はまだ世界のどこにも存在していませんでした。美子さまは七歳でご生母を、十四歳でお父様を亡くされ、十五歳の時、京都御所を取り囲む「禁門の変」が起き、激戦を逃れて寺に避難されました。大政奉還の年にお后に内定、そして入内、二十歳の時に東京に移られました。

一方、赤十字がスイスで誕生したのは、一八六三年、美子さまが御年十四歳の時。スイス人の青年アンリ・デュナンが書いたベストセラー『ソルフェリーノの思い出』という本がきっかけです。誰もが被害者にも加害者にもなり得るという前提で制定された人道のルールであるジュネーブ条約、またの名を赤十字条約、国際人道法は、スイス人だけが知つていても全く意味を成さないことから、諸外国に普及して、国家レベルの約束事としました。

第一部

講演「昭憲皇太后と赤十字の関わり」

大西智子（日本赤十字社広報室・赤十字プラザ参事）

パネルトーク「基金で知る世界の今～イスラムと南スーザンから届いた動画リポートをもとに～」

辻田岳（日本赤十字社事業局国際部開発協力課長）

松波康男（明治学院大学社会学部社会学科准教授）

コーディネーター・眞壁仁美（赤十字国際委員会（ICRC）駐日代表部広報統括官）

録画出演・ショーン・ヘーゼルダイン（国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）ソルフェリーノアカデミー所長）、

ザビーブ・ドミニク（南スーザン赤十字社組織開発部門マネージャー）他

第一部

パネルトーク「今、私たちができる」と～明治から令和へ志を受け継いで～」

パラノビチ・ノルバート（駐日ハンガリー特命全権大使）、船橋真俊（ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー）、一般社団法人シネコカルチャーリーダー代表理事）、辻田岳、

松波康男、今泉宣子（明治神宮国際神道文化研究所主任研究員）

コーディネーター・伊藤聰子（フリークリエイター、事業創造

共催・明治神宮国際神道文化研究所、赤十字国際委員会（ICRC）駐日代表部、日本赤十字社

日本赤十字社の前身である「博愛社」が誕生したのは明治十年の西南戦争の最中です。当時、美子さまは、御年二十八歳でした。美子さまと赤十字のご縁は、「博愛社」が誕生してから美子さまが六十四歳で亡くなるまでの三十六年間です。その日赤も今から五年後には創設一五〇周年を迎えます。

『昭憲皇太后実録』と『日本赤十字第一號』から読む皇后の慈旨「官賊の別なく用るしめよ」

明治二十四年の日赤発行誌『日本赤十字第一號』に掲載された石黒忠蔵（西南戦争時、救護本拠地の大坂軍團病院の責任者、後の日赤社長）が書いた、「博愛社」誕生以前を振り返る文章によると、西南戦争中に、美子さまが軍医の松本順（良順）に「戦地に何物が最も有用成るぞ」とお尋ねになると、松本ドクターは、まず綿撒糸（ひんさんし）（ガーゼ状の繃帶）こそ必要と答えました。傷口を守り治療に有効で、不足している状況などを解説したようです。『昭憲皇太后実録』には、天皇からの救護品に美子さまが手作りの綿撒糸を加えて、明治政府軍のトップであつた有栖川宮熾仁親王（征討総督）に託されたとの記載があります。その際、「官賊の別なく用るしめよ」との言葉を添えられたと伝わる、とあります。前述の石黒の文章にも救護品の受領に際し、「賊にも使用せよとの命を受けた」との記述があり、話が一致します。

佐野常民と大給恒の二人が、敵味方の区別なく救護する組織を発案。佐野は征討総督有栖川宮熾仁親王に博愛社の設立請願書を提出し、明治十年五月許可を得ます。請願書には、天皇皇后両陛下による負傷兵救護にも触れ、博愛社の設立は皇國の民を救う」とあり、「両陛下の慈旨に添ふ」と記されました。

博愛社の資金出納簿の明治十年八月の記載に「一、金千円 宮内省ヨリ賜金」とあり、これが天皇皇后両陛下と「博愛社」のご縁のはじまりです。西南戦争が九月に終結した後も、博愛社は残された負傷兵らを救護しました。

当時、博愛社は誕生したばかりの弱小組織でしたが、小

せよとの命を受けた」との記述があり、話が一致します。これらは日赤の前身である博愛社が出来る前、明治十年三月のことです。

当時の綿撒糸は、反物を二人がかりで両側から広げてセンチメートル幅ほどに裂き、帯状にして手で巻いたもの。実録には、美子さまが女官とともに作りになり、綿撒糸二百反分が数回に分けて救護品に加わったことが記載されています（一反の幅を三千七寸、長さを十メートルと短く見積もって、百反は約一キロメートル分となる）。

【博愛社】の資料群

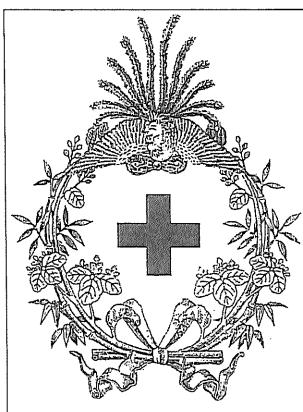


図2 日本赤十字社の社紋

後に天皇皇后両陛下のお許しを経て、博愛社の活動を支援する労働者への顕彰制度が出来ました。その表彰メダルである有功章と特別社員章には、社紋が刻まれています。

【明治二一年、本社報告】

日赤初の自然災害救護、磐梯山噴火災害

『明治二一年、本社報告』に掲載されている小松宮彰仁親王殿下による演説原稿には、福島県の磐梯山が噴火した際、美子皇后のお言葉がきつかけとなり、翌朝、医師を派遣したことが記されています。それまで戦時救護が使命であつた日赤が、はじめて自然災害の救護を行つた瞬間です。

【エルトウール号遭難事故関連資料】

明治二十三年、トルコの軍艦「エルトウール号」が三

重県沖で遭難した際、天皇は宮内省の医者を現地に派遣さ

る手続の中では、天皇皇后両陛下による博愛社への度々の恩賜についても触れられています。博愛社は晴れて国際赤十字の仲間入りを果たし、明治二十年に日本赤十字社と改称しました。

【社紋決定の決裁書】

皇后の御釵子が、日本赤十字社の社紋に

明治二十年四月、社の紋章である社紋が決まりました。昭憲皇太后がお示しになつた「御釵子」（釵子）のデザインに基づいて作成されたと伝わっています。伝説の鳥、鳳凰が、尾羽を立てて正面を向き、赤十字マークを親鳥のよう翼を広げて守っている図案です（図2）。

【エルトウール号遭難事故関連資料】

明治二十三年、トルコの軍艦「エルトウール号」が三

せています。同時に美子皇后も、日赤に救援資金を贈られ、日赤も救護員を派遣しました。

写真には、トルコの負傷者と共に日赤救護員の姿が写っています。

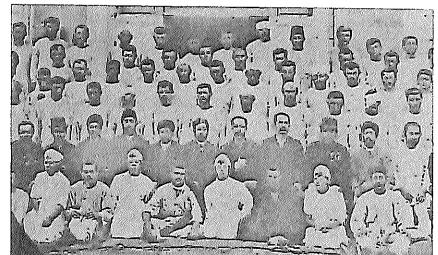


図3 エルトゥールル号遭難事故 救護員とトルコ人乗組員

日清戦争、日露戦争の救護報告書や写真など

日清戦争では、この篤志看護婦人会が大活躍し、大河ドラマの主人公となつた新島八重もその一人でした。美子さまは、広島の病院を巡回して視察なさい、患者を見舞われ、昼夜を問わず活躍する篤志看護婦人会員と救護員を励まされました。

日露戦争でも、美子さまはお手製の綿撒糸を日赤に託され、義足などを寄贈されました。美子さまから下賜された義足を付けて帰国したロシア兵もいたのです。

昭憲皇太后基金の関連資料

明治二十一年、日赤の最初のボランティア組織である篤志看護婦人会が発足すると、全国各地で看護法の講習会の開催や、綿撒糸の製作活動を行いました。会の発起人名簿には、有栖川宮熾仁親王の妃殿下をはじめとする妃殿下方、西郷従道夫人、伊藤博文夫人など政府高官の夫人のほか、大山捨松や津田梅子なども加わりました。この人達の存在が、看護婦に対する社会的な地位を高め、会員数は多いときには十万人に上りました。美子さまはこの会の活動資金を下賜される他、活動を視察され、報告も受けられました。

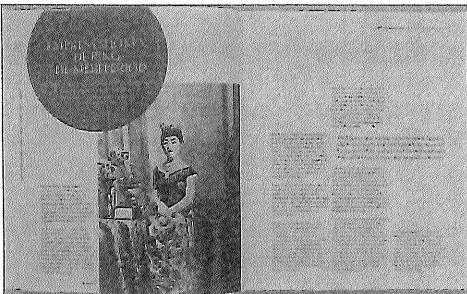


図4 IFRC・ICRC・基金合同委員会発行『昭憲皇太后基金100周年記念誌』

は盛大な拍手に包まれ、本会議において基金が設立しました。

大正三年、美子さまが崩御されると、世界各国の赤十字社から弔意の言葉が寄せられました。美子さまからの寄付金に関する実務は、第一次世界大戦勃発のため一時中断しますが、その間、日赤は資金を

十二年に記念誌を発行。昨年は、第一回配分が行われてから百回目の配分を迎えた(図4)。



図5 赤十字WEBミュージアム

百年以上の時を超えて、今に甦るこれらの史料は、日赤の記憶であるとともに、日本の貴重な記憶でもあると思います。大切に受け継ぎ、未来に遺すべく、力を尽くしたいと考えております。

「赤十字WEBミュージアム」には、日赤所蔵の資料の一部を紹介しています。是非お楽しみください(図5)。
<https://www.jrc.or.jp/webmuseum/>

銀行に預けて利子で増資すると共に、基金の永続性を目指して慎重な規則作りに励み、国際赤十字と丁寧な交渉を重ねました。

大正九年、ついに赤十字国際委員会から基金の定款の正式な承認通知が届き、この基金の運営と管理はすべてイスの赤十字国際委員会と赤十字・赤新月社連盟に委ねられ、日赤の手を離れました。

『昭憲皇太后基金100周年記念誌』

国際赤十字は基金が誕生してから百周年を迎えた平成二

基金で知る世界の今～スイスと南スーザンから届いた動画リポートをもとに～

眞壁 今からちょうど一一〇年前、昭憲皇后が赤十字にご下賜くださったお金を元に皇太后のお名前を冠した基金が赤十字に創設されました。これまで一世紀にわたり世界中の生きる力を支え、背中を押し、世界がみんなにとって住みやすい場所となるよう導いてくださいました。この基金について日本赤十字社の辻田さんと一緒に繰りていきます。辻田さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

辻田 よろしくお願いします。私は今、日本赤十字社の国際部で働いています。具体的な仕事は開発協力といいまして、例えばアジアやアフリカ地域の国々で水や衛生の問題、あるいは災害に備える、このような課題に現地の赤十字・赤新月社と一緒に取り組んでいく仕事をしています。

昭憲皇后基金と私とのつながりは、今から十年前の一二二年に昭憲皇后基金創設百周年のイベントがあり、明治神宮さんと一緒に日本赤十字社が取り組んだことが始まりです。明治神宮文化館（現明治神宮フォレストテラス）で「昭憲皇后と赤十字展」という企画展を開催しまして、

その準備と運営にも携わりました。それ以来不思議な縁で、さまざまなかたちでこの基金と関わりを持たせて頂いております。今日は皆さま、どうぞよろしくお願ひします。

眞壁 また、基金の記念すべき百回目の配分先が昨年決定し、世界で一番新しい国、南スーザンの赤十字社も名を連ねていただきました。独立後も様々な問題を抱える南スーザンの現状、そして、その背景については明治学院大学の松波康男さんとお話を聞いていきたいと思います。松波さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

松波 よろしくお願ひします。明治学院大学の松波康男と申します。専門は社会人類学です。この二十年くらい東アフリカ、特にエチオピアと南スーザンにおいて研究者として実務家としてアフリカと関わってきました。今日は専門的な立場からアフリカの現状、特に支援を受けるようになった歴史や政治などについてコメントできればと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

眞壁 それでは、昭憲皇后基金がどのようにして生まれたのか、また、一世紀以上たつた現在どのような発展を遂げたのか、私たち赤十字の本部があるスイスからの動画リポートをご覧ください。

スイス本部から動画リポート（要旨）

◆昭憲皇后基金合同管理委員会 メルキオール・デ・ムラルト委員長より

昭憲皇后基金は1912年の第9回赤十字国際会議の際に、昭憲皇后からの寄付金10万円（現在の価値で3.5億円相当）をもとに創設されました。目的は、各国赤十字・赤新月社の役割を戦時を超えて、平時でもより發揮して貢とうというものです。その後、皇室や明治神宮、日本赤十字社などからの多額の献金により基金の原資は増え続けました。寄付によって支えられている同基金は、原資から得られる利子を毎年各国赤十字・赤新月社に配分し独自の事業と社の発展に貢献しています。そして、2021年に100回目の配分を記念しました。1921年以来170の国と地域の赤十字・赤新月社に配分され、累計1,400万スイス Franc（約17.9億円）にのぼります。

この基金の目的は、例えは災害対策、保健医療、青少年の育成、献血救急法と救護、社会福祉などの各国赤十字・赤新月社の平時の活動を支援することです。また、国際赤十字・赤新月運動（赤十字運動）が掲げる「人道」の理念を普及し、各社の発展をサポートします。

◆昭憲皇后基金合同管理委員会 ヘイファ・ハリディ理事より

近年、同基金が特に支援しているのは、革新的で人道上の課題に真っ向から挑んでいて、組織強化を掲げる事業です。それは、赤十字運動全体に新しく有益な洞察や学びをもたらし得るからです。さらに各社がイノベーションに取り組み、何がうまくいったかを振り返り実践する過程で直面した課題から学び、その学びを共有することを奨励します。

イノベーションが世界を変え行く中、各国赤十字・赤新月社も昭憲皇后基金の支援のもと、画期的思考や革新的なアプローチ、新たな技術を生み、変化の一翼を担ってきました。

◆国際赤十字・赤新月社連盟（IFCR）ソルフェリーノ・アカデミーイノベーション事業責任者 兼 昭憲皇后基金合同管理委員会委員 ショーン・ヘーベルダインより

この基金はますます重要性を増しています。2019年末、私たちは新たなグローバル戦略「2030年に向けての戦略」を打ち立てました。この戦略は、世界192の国と地域にある各国赤十字・赤新月社が、この先10年間に待ち受けける課題にどう取り組んでいかかを考える道しるべとなります。特筆すべき点は、戦略の立案にあたって、私たちが非常に多くの関係者と協議を重ね、世界の1万人が議論に参加したことです。

そこで特に強調しているのは、各国赤十字・赤新月社が人道と開発、そして社会と保健医療というそれぞれの分野で自らの活動を変化させることの重要性です。大切なのは、素早く適応するための能力や、物事や世の中の流れがどう変化し、世界中の弱い立場に置かれている人々にいかに影響を及ぼしているかを理解する能力、そして革新的で新しいことに挑戦する能力です。これが2030年に向けた私たちの戦略の核心です。

もともと赤十字での人道支援や開発は、民間セクターほどイノベーションが得意ではありませんでした。その意味でも、昭憲皇后基金は重要な役割を担っています。この基金は、インセンティブを与えるだけでなく自分たちのやり方を振り返り、人道支援組織としてより効果的な新しいモデルや新しいアプローチ、新しい事業を創造し、それを試した上で世に送り出すための手段や方法を提供してくれます。そうした新しいアイデアを実現するためには、それを生み出し育む場が必要なのです。それが、世界中で人道的な活動を支援してきた長い伝統と歴史をもつ同基金の真骨頂です。また、同じような目的でつくられた基金は他には存在せず、容易につくることもできない貴重な存在なのです。

眞壁 それでは、日本赤十字社の辻田さんと具体的なお話を

なども織り交ぜながら、少しあみで基金について語つていきたいと思います。まずは、冒頭からこれまで赤十字機関の名前がたくさん出てきましたので、赤十字について少々ご説明します。赤十字の中には、「国際赤十字」が二つあります。一つは私が所属します赤十字国際委員会（ICRC）で、戦争や紛争の犠牲となっている人たちを支援し、保護する赤十字機関です。今、本当にウクライナで同僚たちが頑張っていますけれども、紛争の犠牲となつていただに寄り添う機関がICRCです。国際という冠が付くもう一つの赤十字は、国際赤十字・赤新月社連盟といいます。

世界に一九二ある赤十字社、赤新月社を束ねるのが、この連盟です。ちなみに、イスラム圏だと赤い十字ではなく、三日月を使つて赤新月と言います。

この昭憲皇太后基金を合同で管理しているのがICRCと連盟で、動画リポートにもあつたとおり、昭憲皇太后基金は戦争のような有事や非常時における支援を想定したものではなく、平時の事業に特化して赤十字社、赤新月社に充てられます。なので、合同委員会の中でもどちらかといふと連盟のほうがイニシアチブを取つています。配分先の発表は、毎年昭憲皇太后のご命日である四月十一日に合わせて行われ、今年も間もなくの発表となります。

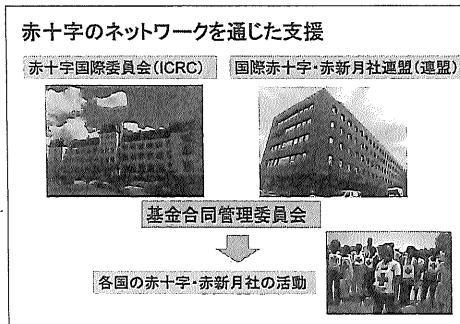


図1 赤十字のネットワークを通じた支援

案して、それを実行する制度になつています。毎年夏から秋にかけて、各国の赤十字・赤新月社から合同委員会に対して、基金を用いた活動の計画書が提出されます。合同委員会は、活動の優先度や実効性などを精査して、最終的に三月に配分先を決定します。そして毎年、昭憲皇太后のご命日である四月十一日に合わせて世界中にその決定を公表するという流れになつています。

現地のニーズに応じて、現地の赤十字・赤新月社が活動計画を策定し、現地の人々が主体となつて人道課題に取り組む。これがこの基金を活用した支援の仕組みです。

次に、基金の使途を簡単な年表にまとめました（図2）。基

金が創設された当時は、世界中で結核が大流行して、その時代は死につながる病気ということと、最も優先事項でした。そこで基金による活動の多くが結核の予防と治療に当てられま

した。

第一次世界大戦後、第二次世界大戦に向けて、再び世界中が戦時体制下に置かれました。基金は戦時救護を目的としていましたが、戦時下での医療や保健を維持する活動に使われました。

第二次世界大戦の終結により、各国がゼロからの復興に取り組む中、基金は例え災害への備えや、災害の救護活動に使われ、あるいは公衆衛生の取り組みなどに使われるようになりました。

そして、一九六〇年代になると、特にアフリカ地域で多くの新しい国々が独立しました。これに合わせて社会福祉や救急法の普及、献血制度の促進といった新しいニーズが生まれ、基金がそうしたニーズに柔軟に応えて、役立てられていました。

さらに一九九〇年以降になりますと支援の範囲が広がり、青少年

ポートの中で触れられていましたとおり唯一無二の、各国の赤十字社、赤新月社にとつては本当に頼もしい存在ですね。辻田 そうですね。このような基金は非常に貴重で、どこかの国のどのような災害でも、また人道危機であつても支援活動に用いることが出来る。その意味で非常に幅広い可能性を持つ基金です。

眞壁 申請制といふことなのですが、昨年は過去最多で五十二社が申し込んで、十六社が選ばれたと聞いています。各社はどのように申請し、どのように選ばれるのでしょうか。

辻田 それでは昭憲皇太后基金がどのような仕組みで、どのような活動に使われているかをご説明します。

まず、赤十字国際委員会と国際赤十字・赤新月社連盟という二つの組織から三人ずつ合計六人の代表により、昭憲皇太后基金の合同管理委員会が構成されています。合同委員会は、基金の運用や配分先の選定を行います。一方で、実際に活動に携わるのは合同委員会ではなく、各国にある赤十字社、あるいは赤新月社です（図1）。

先ほど申請制というお話をありましたが、まさにこれが大切です。合同委員会や日本側ではなく、その地域で必要な支援を理解している現地の赤十字・赤新月社が活動を立

昭憲皇太后基金の使途

年代	主な支援内容
1 1921年～1934年	結核対策、公衆衛生
2 1935年～1945年	結核対策、戦時下の医療
3 1946年～1960年	災害救援、公衆医療
4 1961年～1989年	救急車、社会福祉、血液事業
5 1990年～2000年	救急法講習、青少年事業、障がい者支援 孤児への支援、通信機器整備 防災・減災活動、児童虐待対応、移民の支援 若者への支援、リハビリテーション施設
6 2001年～現在	

図2 昭憲皇太后基金の使途

ボランティアの育成、あるいは障がいを持つた方々の福祉の向上などに活用されるようになりました。また、両親を失った子どもたちのための施設を作ったり、災害時に連絡をとるための通信手段の整備にも基金が活用されました。このように福祉活動、そして様々な立場の人達が安全・安心に暮らせる社会を築く取り組みへと変遷してきました。

そして二〇〇〇年代になりますと、また新たな取り組みが始まりました。例えば、児童虐待の防止、防災・減災の活動などが世界中で活発になります。そして、移民の方々への支援、さらに若い人達による人道活動への支援など、今までになかった独創的な新しい支援のあり方が模索され、積極的に活用されていきます。このように、世界の歴史とともに基金も発展し、支援の対象が変わっていましたことがお分かりいただけるかと思います。

最近の事例をご紹介します。まさに今、私たちが直面している課題にも基金が対応しています。まず、中米のニカラグアでは、赤十字のボランティアが高齢の方、特に家で孤立しがちな方々を屋外に案内して健康増進を図るプログラムを行っています。高齢化の時代を迎えて、年齢に関わらず健康に幸せに生きるために活動を使われています。次に、キルギスタンでは交通事故を防ぐプロジェクトが実施されています。赤十字と交通安全は結び付かないと感

じられるかもしませんが、多くの国では災害や病気のリスク以上に交通事故が、特に子どもたちの身近な脅威となっています。そこで、子どもの頃から交通事故を予防するプログラムが実施されています。

スロベニアという国では、少数民族やハンディを持つた方々などへの言葉の暴力、すなわち「ヘイトスピーチ」を撲滅するために、小中学生向けの教育用テキストを作成するために使われています。

次に、ウクライナでの活動です。皆さま、報道でご存じのとおり、ウクライナは今困難な状況に置かれています。実は三年前の二〇一九年にウクライナでも基金による支援が行われました。当時はボランティアの管理が十分に出来ていませんでしたので、まずボランティアがウクライナ赤十字社に登録手続きを行い、自分達の身を守る安全講習や、被災者などへのこころのケアに関するトレーニングを受けられるようにしました。基金の支援で育ったボランティアの皆さんには、今、危険と隣り合わせにある方々、地下のシェルター等で避難生活を送っている方々のもとに地上から食料を運んだり、あるいははげがをされた方々を病院に搬送したりと、まさにこの人道危機の只中で活動をしていました(図3)。

次に、アフリカのウガンダです。こちらでは携帯電話の

アプリで献血者を登録して、「血液が今足りません」、「そろそろ献血ができる時期です」といった情報を若い人たちに配信しています、このアプリを開発するために基金からの支援が用いられました。

最後に、カリブ海に浮かぶ島国、トリニダード・トバゴです。ここではバーチャルリアリティーという、オンラインゲームのような形で、若い人たちが携帯やパソコンを用いて、災害を追体験して、いかに行動すれば命を守れるのか、周りの人たちを助けられるのかといった内容を学べるツールを作りました。

恐らく皆さまがイメージする赤十字の支援という、災害の現場で医療支援を行なうとか、あるいは食べ物を届けるなど、昔から変わらない保守的なイメージがあるかもしれません。

ところが、人道支援の世界も変化しており、いわゆる最新の

IT技術を活用することで、より多くの人々を助けることが出来る。あるいは、自分たちの安全を守りながら多くの人たちを効率的に助けられる。もしくはどこに困っている人がいるのかを即時に把握できる、このような分野でIT技術、あるいはイノベーティブなアイデアをさらに取り入れる余地があります。赤十字も先進的な民間企業などに比較すると二十年、あるいは三十年遅れている感じですが、まさに昭憲皇太后基金が赤十字を変える、人道支援の形を変える、そのためのけん引力となつていて感じるといえるでしょう。私にとって昭憲皇太后基金は、歴史は非常に古いのですが、常に新しい人道支援のモデルを作り出すもの、これがこの基金の特徴ではないかと思つております。

眞壁 そうですね。昭憲皇太后が赤十字にお金を下賜くださったときから、先を見据えていたところがあつたのではないかと想像します。辻田さんのお話を聞いて私もウクライナに駐在していた同僚の話を思い出しました。今回の紛争激化以前に、ウクライナ赤十字社の活動について同僚に聞いたところ、「有事の場合に備え、赤十字のボランティアがすぐに救急法や人命救助などの緊急対応に当たれるよう訓練をして備えている」と答えていました。本当に備えるだけで終わつていれば良かったのですが、私たちがそうやって有事に備えていたことが今、結果としてウク

ウクライナ
(2019年)

ボランティア向けの
オンライン研修ツール
を整備。
ボランティアのデータ
ベースを作成

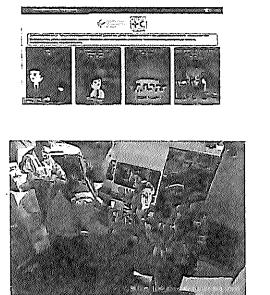


図3 基金によるウクライナでの支援

南スーダン赤十字社からの動画リポート（要旨）

◆南スーダン赤十字社 組織開発事業責任者 ザービ・ドミニク氏より

南スーダン赤十字社は昭憲皇太后基金の配分先となり、南スーダンの気候変動適応策の一環として果樹の植栽キャンペーンを立ち上げました。

私たちはどうすれば大勢のボランティアに参加してもらえるかを考え、まずは果樹の植栽を通じて、若い人たちに参加を募ることにしました。資金の拠出を受け、10の支部からボランティアを募り、支部毎に苗床の作り方を教育しました。若者たちは、6000本もの果樹の苗木を地域の緑化を目指す地域住民に配布し、果樹を植えることの重要性をメディアを通して伝えました。

このキャンペーンが無事成功したのは、もちろん昭憲皇太后基金のおかげだけではありません。赤十字運動内外のパートナーからも資源を調達し、公的機関の助力も得たことで、南スーダン赤十字社のキャンペーンは大成功したのです。

今後に向けては、より大きなビジョンがあります。政府をサポートし、今後10年間で1億本の木を植えるという目標です。

南スーダン赤十字社は公的機関とともに、私たちに何ができるかを考え、信念をもつて貢献して行くつもりです。引き続き、私たちのさまざまな能力やボランティアのネットワークを活用することになります。

◆ジュバ市エファタ小学校校長 チャップレン・ディラ・ギデオン氏より

私たちは大きな期待を抱いています。気候が変化し暑さが増す中、環境を変えるにはこうした植樹活動が大変重要だからです。植樹をしたら灌漑（かんがい）が必要になるので、学校に掘削孔を設けました。

土壌には砂利もあり、環境は良くないものの、おかげでなんとか水やりができています。

人々が食料の配付に頼るばかりで、将来を見据えた飢餓への対処法を考えなければ、季節によって困難に陥るということが続きます。

現在、木材のように簡単に切ったり、処分したりして良いものと考えられている木は、重要性が認識されていないので、今後近隣のコミュニティーの認識向上も図らなければなりません。

◆南スーダン赤十字社事務局長 ジョン・ロバー氏より

気候変動による影響を南スーダン国民の誰もが実感しています。

過去3年間に關していくれば、10州のうち7州で洪水が発生し、大勢の住民が避難して家畜も被害を受けました。また、橋や道路、医療施設や学校などのインフラが破壊され、流されました。

気候変動がもたらす洪水の被害から人々が回復するのに必要な支援活動を行ってきましたが、これから目標は、気候変動対策として100万本の木を植えて緑地を増やすこと。そして、今後10年間で1億本の木を植えるという政府の戦略計画に貢献することです。それにスタッフとボランティアの技術能力を高め、国内の広大なネットワークを活用して気候変動の影響について発信すれば、國民に気候変動問題の対策に貢献する方法を伝えられると思っています。

ライナの人々の命を救うために活かされています。今このような事態になってしまったことは悲しいことです。でも、備えておいて良かった、という複雑な気持ちがしています。

話を戻しますが、昭憲皇太后は現在の価値にしておおよそ三億五千万円もの金額をご下賜してくださったということです。既に百年以上運用していますが、その原資を保つために追加の寄付などを募っているのでしょうか。

辻田 はい。基金は、これまでの百年間に約一七〇ヶ国の支援に用いられてきたわけです。基金は昭憲皇太后がご下賜くださいましたところから始まっていますが、その後何回も皇室からのご下賜、そして日本の一般の方々、多くの皆さまがご寄付をくださって、少しずつ育まれてきました。これが昭憲皇太后基金なのです。そこで、私たちの大切な役目は、この基金を未来につなげていくことだと私は、この基金が、将来さらに発展していくため、皆さんからもぜひお力添えいただきたいと思っています。故に、この基金が、将来さらに発展していくため、皆さんもこの基金を育てるためにできることを果たしていくたいと考えます。

眞壁 つまり、原資は一〇〇%日本からの資金援助ということですね。

辻田 そうです。まさにこれは日本で生まれて、一〇〇%

日本が育てた世界のための基金と言えます。

眞壁 非常にユニークな基金ですね。そして、昨年独立十周年を迎えた南スーダンの赤十字社が、記念すべき基金の百回目の配分先（十六社のうちの一社）に選ばれました。それでは、今回どのような事業に基金が必要とされていたのか、南スーダンから届いた動画リポートをご覧ください（内容については次頁参照）。

眞壁 ここからは人類学、そして南スーダン、エチオピアなどの東アフリカ情勢が専門の松波さんとお話ししたいと思います。

私自身、南スーダンが独立して半年後に三ヶ月間、南スーダンに赴任しましたが、バナナやマンゴー、果物がとてもおいしかった印象があります。南スーダンの人たちに「これ、日本に輸出したら売れるよ」と話したこともあります。時期になるとたわわに実っている並木をあちらこちらで見かけました。赤十字ボランティアの人が木に上つて取ってくれて、本当に楽しみながらちそうの一つでした。しかし、日々の食料確保については皆さんとても苦労していました。南スーダンは世界で一番新しい国ですが、また最も貧しい国の一つでもありますよね。

松波 はい。そうですね。南スーダンの人々がどのようにして国際的な支援を受ける立場となつたか、またその歴史、

政治的な変遷について簡単に説明してみたいと思います。

説明に移る前に、まず私が何者かというお話をさせていただきますが、東アフリカにフィールドがあり、社会人類学を専門としています。現地に着くと大体まずテントを広げて、長いときは八ヶ月ぐらいテントで生活しながら活動するということもあったのですが、そこで何をしているのかというと、現地の人々の生活に交わって、現地の文脈に根差して人々の生活世界を理解しようと試みてきました。今日はそういう立場で南スーザンの話をしてみたいと思います。

初めに一般事情ですが、日本の一・七倍ぐらいの国土があり、人口は一一〇〇万人程度であるということです。南スーザンは二〇一一年にスーザンから独立する形で誕生した国家です。なぜ南北という形に分断したのかといふと、植民地主義がその南北分断の根っこにあるということが指摘されています。

具体的にはイギリスがエジプトと共同統治をしていたスーザンで、北部にはイスラームを認めて「アラブ人」としての自覚を促す一方、その影響力が及ぶのを嫌って、南部については宣教団による教育を英語と民族語で続けました。このように北部と南部がばちっと分かれ、北部が政治的中心となり、南部は経済、政治的に周縁地域となるに

至りました。

その後、一九五六年にスーザンは宗主国から独立を果たすわけですが、その一年前に南部兵士が武力蜂起を起こしました。つまり、今の南スーザンにあたる地域の兵士たちがクーデターを起こしたわけです。それが第一次スーザン内戦と呼ばれていて十七年間継続しました。また一九八三年に再び内戦を経験します。これが二十年以上継続した第二次スーザン内戦であり、様々な統計がありますが、二百万人近くの死者が出たと言われています。

つまり、周縁化されたスーザン南部が、北部の政治的中心に向かつてクーデターを起こし、武力闘争を続けた結果に、ようやく自分たちの主権を手にして、自分たちの手で国家を運営していくという機会に恵まれたのが二〇一一年の独立です。

ただ、残念なことにそのわずか二年後、南スーザンの大統領と副大統領が争い、軍事衝突が発生してしまった。その二年後に周辺国や国際社会の仲介があり和平合意に至りますが、再度二〇一六年に武力衝突が発生してしまった。そういった流れで二〇一八年に再び和平合意に至り二〇二〇年に、暫定政府が発足したというところが今日までの流れになります。

すなわち非常に長い内戦状態を経験した人たちが多く暮

らすのが今日の南スーザン。例えば、一九五五年に現南スーザンに生まれた六十七歳の人は、生まれてすぐ第一次スーザン内戦、そして第二次スーザン内戦を経験し、南スーザン独立後におよそ二年の紛争ということで、四十年近くが紛争状態なわけです。人生の三分の一ほどを戦時で生きているというわけです。何となく、日常イコール平和で、内戦イコール非日常みたいな図式が当たり前のように考えてしまふのですが、南スーザンに生きる人々にとっては、それは必ずしも当てはまりません。

二〇一六年の武力衝突の時に私は首都のジュバにいました、オフィスで仕事をしていました。パンパンパンと外から聞こえてきて、ずっと鳴りやまなかつたわけです。これはおかしいっていうことでニュースを見たり、現地の情報を調べると、大統領府で衝突が起きたという事が分かり、さらに戦火がまたたく間に市内に展開したという事を知りました。その翌日は、ドーンドーンというような対戦車砲の音が鳴り響いていました。ジュバで生じた戦火は、どんどん南スーザンの各地に広がってしまいました。

その後、二〇一八年に紛争当事者が和平に合意するわけですが、その際に周辺国が仲介の役割を果たしました。地域的な紛争の解決については、紛争当事者と国連といった枠組みで対応されることが多かったのですが、今では地域

機構の役割が注目されています。南スーザンの紛争においてもAU(アフリカ連合)やIGAD(政府間開発機構)とよばれる地域機構が大きな役割を果たしてきました。そして、二〇二〇年二月に暫定政府が設立されました。現在は、仲介による暫定政府ではなくて、選挙による新しい政府を作ろうという事が期待されています。以上、今までの簡単な説明でした。

眞壁 ありがとうございました。私が南スーザンに行つたのは独立直後で、まだお祝いムードもあって、ある程度人々が希望を持っていました。今振り返つてみると、ほんの短い平和な日常であったと言えます。しかし、当時すでに南スーザンの同僚は、「今は独立して間もなくて、まだスーザンとの武力衝突も散発的にあって共通の敵と戦っているからまとまっている。でも、このスーザンという共通の敵がいなくなったら、多分民族間同士の争いが顕著化して、南スーザンの国内は紛争状態になるだろう」と言つていました。それが本当に悲しいかな、現実になつてしまいました。松波さんがおっしゃつていた通り、これまでに戦時が日常であった南スーザンですけれども、独立後に今のような状態になると思っていましたか。また、平和が日常となることは、南スーザンでは難しいのでしょうか。

いう問い合わせの答えは、「イエスでありノーでもある」が正直なところで、やはり一つの外側から決められた国境線の国家の枠組みの中に多民族が暮らすということの難しさっていうのは、他のアフリカの国が証明しています。同じような目に遭つてしまわない保証はどうにもないわけなので、そういう危険というのを感じていました。

他方でノーと言いたい気持ちもあります。なぜかというと、この独立は住民投票による、住民の総意という形で起っています。南スーダンの独立の投票には九九%近くの住民が独立を支持しました。すなわち南スーダン独立は、長らくスーサンの抑圧に苦しめられた人々の悲願であった。たとえその未来に南スーダンで対立が起きてしまうという可能性を含んでいたとしても、やはり独立というのは人々の悲願だったということは間違いありません。なので、内輪揉めが起きてしまうかもしれないという悲観的なところもありましたが、そうはならない未来もある時点では描けていました。そういう意味でやはりノーと言いたい気持ちもある。

二つの話は難しいですね。平和っていうものの考え方自体が、やはり現地と近代西洋社会で違つていて、そこもあり、なかなか一言で言い切れないのですが、こういう紛争を止めるのはやはり周辺国、また地域機構の支援



図5 街路樹として各地で見かけたマンゴーの木。たわわに実るマンゴーは甘くて美味(ICRC)



図4 独立直後の南スーダンで自立した生計を営めるよう、農具や野菜の種、労働のための食料などの配付を国内各地で行った(ICRC)

どの家畜が財産で、お金と同じような価値がありますので、家畜へのワクチン接種も行っています。そして、戦傷者への医療提供に加えて、綺麗で安全な水を届ける事業も行っています。また、水源を見つけて井戸を掘ったり、タンクを設置して安定供給するというようなこともあります。あと

などが必要になると思います。

眞壁 ありがとうございました。松波さんから南スーダンの紛争の話を出ましたので、少しICRCの立場から南スーダンの現状をお話ししたいと思います。

私が現地に行つたのは十年前ですが、スーダンから南スーダンに帰還する帰還民の方たちがたくさんいました。自分たちの国ができるて、自分たちの土地で生活を始めるということで、まずは暮らしていくための物資の配給などを実施しました。そのワンシーンがこの男の子二人が肩を組んでいる写真(図4)です。

そして、この写真(図5)が先ほどお話ししましたマンゴーです。日本のスーパーで売っているマンゴーよりは小ぶりですが、本当に甘くておいしかったです。南スーダンには果物の種類は色々あるのですが、他の食料は乏しかったので、南スーダンの各地で食料をはじめ、農業を始めるための用具や野菜の種などを配付していました。自然に恵まれている所ではあるのですが、気候がものすごく厳しくて、灼熱の太陽で体温温度も五十度ぐらい。なので、なかなか作物も育ちません。

南スーダンでは、救援物資の配付の他にも、家族の再会支援なども行っています。長い紛争で家族が散り散りになつて、周辺国に移つてしまつていてます。また、牛な



図6 ICRCの活動規模でみると、南スーダンは10年連続トップ5にランクイン。2022年当初は4位だったのが、2月以降のウクライナ危機で5位に(ICRC)

激化して今大変なことになっているので、ウクライナが二番目になりました。なので、シリアを筆頭に、ウクライナ、アフガニスタン、イエメンと続いて、南スーザンは五番目となります。

駆け足でICRCの現地での活動を紹介させていただきましたけれども、辻田さん、南スーザンでのICRCの紛争犠牲者支援にも日本赤十字社は医療職員を派遣してくださいますよね。

辻田 そうですね。日赤からは、これまで大体三十人弱になりますが、日赤病院の医師や看護師を、ICRCが運営

する病院に派遣して、手術に立ち合ったり、あるいは現地の医療スタッフを育てる、そのような活動をしています。

また、人を派遣していますので、南スーザン赤十字社とは直接、今どういったニーズがあるのか、そのようなことをやりとりしています。紛争地といふと、紛争の影響だけではなく、気候変動の問題があつたり、保健や医療の問題があつたり、様々な人道課題がつながっています。先ほどの動画にあつた基金の支援で植樹をする取り組みは、何か一見紛争と関係ないように見えるのですが、実は食料をみんなで育て、ボランティアさんがみんなで食事をすることが、人々の融和、お互い理解し合うことにつながる。こういった地道な活動も結構大切なではないかと思います。

第一部

今、私たちができること～明治から令和へ志を受け継いで～

伊藤 それでは、これより第一部のパネルトークを始めさせていただきます。

第一部のコーディネーターを務めさせていただきます伊

藤聰子です。皆さんとは報道情報番組などでお会いする機会もあるかと思うのですが、実は私、地域経済の活性化であつたり、社会課題について事業を通してどのように解決していくべきなどを研究テーマに活動しています。特にJICA、国際協力機構を通じて国際協力の現場に何度も取材に行かせて頂いておりまして、非常に多くのことを学ばせて頂きました。しかしその一方で、地域の人たちにどうして何が必要な支援なのか、少々課題に感じる」ともありました。そういう意味で本日のこのパネルトークを通じて、人道支援の在り方というのはどうあるべきなのがどういうこととも、自分自身で新たに考えるきっかけになれば良いなど思つております。どうぞよろしくお願ひいたします。

さて、第一部では現在も続いている世界最古の国際人道基金、昭憲皇太后基金の始まりから歩み、そして今どのよ

眞壁 そうですね。私が今回この基金で興味深いと思うのは、配分先に決定した国がどんな事業に資金的なサポートを必要としているのか、そのリストを見ることで今この時代を生きる私たちが抱えている問題や課題が浮き彫りになつてているという点です。気候変動や感染症、高齢者や児童の養護、女性の自立や活動のデジタル化など、本当に時代を映す鏡のような存在が昭憲皇太后基金です。世界中に広がる人道ネットワークを生かして人々に寄り添い、誰一人として取り残さない支援を実現する上で大変貴重な財源となつてしているのが、この昭憲皇太后基金であると思います。全人類が助け合つて発展するためのスポンサー的な存在です。その原資は100%日本からの拠出であるということは本当に素晴らしい 것입니다。

この後続く第二部では、基金や赤十字を超えた新しい日本発の支援の形について議論を続けます。松波さんと辻田さんは引き続き参加していただきます。それでは、第一部はこれで終了とさせていただきます。お一方、どうもありがとうございました。

うな貢献をしているのかについて、お話しして頂きました。平時における世界最古の人道支援基金が日本発で、しかも皇太后、女性のご意志で創設された。まだ世界とほとんど繋がりといつもが感じられない明治の時代に、まさに世界に向けて人道支援を行つたという事実に対して、本当に感動すると同時に日本人としても大変誇りに思つた次第です。

このすごく素晴らしい志を何とか未来に繋げていかなくしてはならないということで、第二部では実際に現地で活動されている皆さんのお話を伺いながら、私たち日本として、あるいは私たち個人として、未来に向けてどのようなことができるのかということについて、一緒に考えて参りたいと思います。

この第二部のパネルトークでは、日赤ボランティアでグラフィックレコーダーの田中友美乃さんが、議論の様子を絵によつて再現をしてくださいます。この完成品は第二部の終わりでご紹介したいと思います。

それでは、早速議論のほうに入つていきたいと思いますが、この第二部から新たに三名のパネリストが加わりますので、私のほうからご紹介をさせて頂きます。

お一人目は、駐日ハンガリー特命全権大使、バラノビチ・ノルバートさんです。よろしくお願いします。ぜひ自

己紹介を兼ねてお話しください。

パラノビチ ご紹介いただきました、ハンガリー大使のパラノビチと申します。本日はご招待いただきありがとうございます。ここ明治神宮で、赤十字国際委員会様、また日本赤十字社様と合同で開催されるシンポジウムに登壇できることを名誉に思います。

実はハンガリーと各団体、また昭憲皇太后基金とは長い協力関係を築いてきました。日本とハンガリーの外交関係は、一五三年前の明治時代に始まりましたが、一つのエピソードとして、当時、来日したハンガリー出身のヴァイオリンリスト、レメーニ・エデが明治天皇と昭憲皇太后の御前で演奏したことを紹介します。

昭憲皇太后基金は百十周年を迎えますが、一九二一年から一九二一年までの全百回にわたる支援先リストを見ますと、戦前はほぼ毎年のようにハンガリー赤十字社の名前が載っています。支援内容を見ると、ほとんどが結核対策、要するに感染症との闘いの手助けです。

そして、病気との闘いといえば図1でもご覧頂けるとおり、一八〇〇年代に生きたハンガリーの医師で、手洗いの父とも呼ばれているセンメルウェイス先生と日本との関係があり、二〇一八年に皇后陛下のご臨席を仰いで、広尾の日本赤十字病院の中庭にて、センメルウェイス顕彰胸像



図1 センメルウェイス顕彰胸像の除幕式

伊藤 よろしくお願ひいたします。船橋さん自身もアフリカの緑化や、農業の支援をされているということで、非常に興味深いお話を楽しんでおります。よろしくお願いいたします。

船橋 よろしくお願ひします。

伊藤 そして、三人目の方は、明治神宮国際神道文化研究所主任研究員の今泉宣子さんです。よろしくお願ひします。今泉 あらためまして皆さま、こんにちは。明治神宮の今泉と申します。私はここにいらっしゃる皆さまのような人

道支援の専門家でも、海外で活躍している人物でもないのです。が、明治神宮に奉職しているご縁で、この

昭憲皇太后基金の歴史について本にまとめる機会がありました。ジュネーブのそれこそ合同管理委員会の皆さまとお会いしたときに、「宣子さん、日本には

の除幕式を行いました。これは日本赤十字社様とのつながりであります。

伊藤 そうなんですね。今日は実際にハンガリーでの人道支援の様子も交えてお話を伺いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

パラノビチ よろしくお願ひします。

伊藤 続きまして、ソニー・コンピュータサイエンス研究所

シニアリサーチャーの船橋真俊さんです。よろしくお願ひいたします。

船橋 よろしくお願ひいたします。この後もお話しします

けれども、私自身アフリカでもいろいろな活動をする中で、やはり現地の有事、いろいろな紛争や飢饉、そういう非常事態に対する支援という的是かなりメディアでも取り上げられてきて、それ自体はもちろん価値があることなのでですが、やはりもつと根本的な、長期的で持続可能な平和といつたものを考えたときに、こういった平時の支援というもの、今日私も一部をあらためて拝見しまして、非常に長い視野で、しかも広く人類全体、もしくは地球規模でのを考えていらしたんだなというところで、非常に貴重な基金であるなどという思いを新たにいたしました。今日はこの場をお借りしていろいろな議論が展開できればよいなと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

Empress Shokken Fundという世界に誇るべき開発援助の基金があるのに、世界の人がむしろそれを知っているけれど、日本の人人がそれを知らないのは残念だ」とお聞きして、基金の歴史とこれからのこととに心を寄せていました。ですから、今日は専門家ではないので、むしろ質問をする役割として皆さまにお話を伺って、この支援をこれからもつと発展させるためのアイデアをぜひ頂戴したいと思っております。よろしくお願ひします。

伊藤 是非よろしくお願ひいたします。

そして、第一部に引き続きまして、明治学院大学社会学部社会学科准教授の松波康男さん、そして、日本赤十字社事業局国際部開発協力課長の辻田岳さんにも引き続きトーキーに参加していただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

それでは、早速議論に移りたいと思います。第一部のテーマをより広く、そして多角的に捉えていこうということでおまことに地球規模の課題、これが人道支援の現場にも大きく変化をもたらしているようです。先ほど南スーダンの植林の話がありましたがけれども、気候変動や貧困という世界共通の課題が南スーダンにも存在し、南スーダンの紛争の解決も実は緑化と密接に関わっている部分があるのではないかということで、様々な問題に対しても多角的に解決

していくことが求められています。これは今田のテーマになつてゐるSDGsにつながる活動が人道支援に求められている状況にあると思います。

ている状況にあると思います

緑化を実践されているということ。どのような活動をされて、それが未来への处方箋としてどんな役割を果たすのかということをお話しいただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

船橋ソニーCSLを通じて取り組んでいた、緑化をしつつ食料生産をする協生農法というプロジェクトについてお話しします。

和自身もともと農圃師であると同時に科学者でもあります。それが結果的に現地の実証実験を通じて広がりつつあります。

物を植え合わせたりして作つていく、食料としてのアウトプットに非常に目線が集中しています。そういうふた作物というのは、実は生態系の中の植物の中の一つです。大元になる生態系というのはもつと多様で、生態系そのものの丸ごとつくっていきながら生産性も高めるというのが、協生農法のアプローチになっています。

で
い
ま
す

具体的には、生態系が発展していくプロセスは自然の力を使うのですが、最初にどのような植物を植え合わせるとか、それがどのように遷移していくか、どのような便益を取り出していくか、初期設定や管理を人の手で行います。協生農法の場合、それは主に食料生産という側面や、干ばつ対策であるとか、農業生産の安定性といった、調整サービスと呼ばれるものを目的に応じて高めていくような管理戦略を、科学的知見を基に構成していきます。

が、水をきれいにするという作用ももちろんあるのですが、ここは社ですから精神的な価値ですとか、文化的サービスと言われる価値が乗つてくる。そのような森の設計になつており、これは私ではなくその当時明治神宮の森を構想された林学者の方々が、はつきりとそのように計画書に記載して運営してきたという歴史があります。

アフリカの話に移ります。私がこういつた明治神宮の森ですとか、あとは日本における協生農法の実験を通じて科学的に構築してきた理論を考えると、従来の一種類だけ育てるモノカルチャーのような農業よりも、このような拡張生態系に立脚した農業というものは、実はサハラ砂漠の南側で砂漠化の危機に瀕しているような所で、農業生産として

具体的に各地で行つた実験としては、一千平米ぐらいの小規模な圃場に、大体二百種類ぐらいの有用植物、これは野菜であるとか、ハーブであるとか、先ほど出てきました果樹や薬用植物、生活資材ですとか、アフリカでは四十種類ぐらいの穀類、現地にある有用植物、家畜の餌になるもの等を密に植え合わせて栽培します。

収穫できる産物の例としては、スーパーで売られているような代表的な野菜もありますし、その地域で伝統的に食用として使われてきたもの、あとは同じ野菜や果物でも、豊かな生態系の中で育つと色んな形になったり、花を咲かせたり、一見何の野菜なのか分からぬ形になったりしますが、そういうしたものも含めて総合的に活用していくアプローチを取っています。

田沢は宮に今こそ豊かな森になつてありますか。百年前は実は更地でした。明治神宮の例に限つていいますと、百年前に全国から十万人のボランティアが、十一万本植樹をしたと聞いております。それが百年間自然遷移して、生態系が森を形成していく力を生かす形で管理すると、このように都心であるのに自然放任では得られなかつたであろう豊かな森が得られるということが分かつています。この原理は実は最初に紹介しました協生農法とも生態学的に共通しております。私はこれを学術的に拡張生態系と呼ん

現地で二〇一五年からNGOと協力して、また実際に現地で新たなるNGOも設立しまして実験してまいりました。

二〇一五年から最初の実験を始め、現地にまだ残つていて一五〇種類ぐらいの野菜ですとか、果樹ですとか、有用植物の苗というものを集めてきてまして、五百平米ぐらいに密に植え合わせるということをやりました。元の状況としては、人為的に砂漠化してしまった土地を使いました。一九六〇年代ぐらいまでは比較的豊かな森林があつた所ですが、気候変動と不適切な農業によつて土地が疲弊して、ほとんど有機物がない硬い地面になつて、雨が降つても草が生えないような状況になつていきました。

そこに一五〇種類ぐらい植え合わせて協生農法をやって、年ぐらい経過すると密林のような生態系に変貌しました。人が初期値を設定して、きちんと生態系のレベルで構築することで、このように砂漠化というものを逆転させることができることことが分かつてきました。

ることが逆に現地の生態系を疲弊させてしまつて、支援すればするほど非効率になつて悪循環に陥るリスクがあります。協生農法の場合は砂漠だった所を緑化しつつ、多面的な活用を含めて食料生産をして、現地の経済を自立的に回せるレベルのインパクトというものを、小さな農園レベルから、実証実験の結果として得ることができます。

ソニーコンソーシアムというものは基本的に研究機関ですので、こういった成果を基に国際シンポジウムを現地で過去五回にわたって開催してまいりました。その中で現地の政府や、外務省の後援を受けたり、ユネスコの研究プロジェクトなど、様々な制度的な支援を受けて、現地のNGOを設立して活動をしてきました。

現在、ブルキナファソは治安の悪化で非常にアクセスが悪くなっていますが、最初にソニーコンソーシアムから投資して、デモができる展示農園を作りました。それもテロとの戦いで何度も撤退したり、一進一退を繰り返しているのですが、そういうところから現地のファンディングにつながりました。例えば隣のマリ共和国のレッドゾーンにも、現地のNGOを通じて二年間の普及を行いました。戦争状態ではないですが、テロに遭う危険性が高い所でして、そういう有事と平時の間のような所で支援を行っています。あとはコロナのせいで食料供給が途絶えているようなトーゴの国家支援を始めています。

アフリカは本当に一筋縄ではいきませんので、外から何かソニーの格好いい技術を持つてきて、じゃあそれ使ってねといつても解決できる問題ではなく、非常に多面的な取り組みの上で、現地に生きていく人々が自活していくことが中心にありますので、まず現地にNGOをつくりました。それだけだと活動を適切にコントロールしていくことがなかなかできないので、ソニーコンソーシアムはまず科学的な知見で、どのようにしたらきちんと生態系が立ち上がるのか、というところをサポートしました。昨年からは、現地の活動の質を維持するためにSyncro社という株式会社をつくりまして、サイエンスを基盤にして認証を提供するという支援を始めています。

同時に今日のお題ですが、ファンデの場合は経済的支援や、それに伴つた制度的支援、ガバナンスというのも非常に大事でして、アフリカの場合、本当に外から投資をしてしまつて、依存体質が非常に強いんです。なので、お金を投資したときにどういうふうにそれが使われているか、きちんとガバナンスが必要がありますし、有効に使われるかという意味では、こういった科学的な知見、その認証というものとタッグを組んでやっていく必要があると思いま

ロジェクトにも協生農法の教育を行つたり、活動が広がっております。

現地では、旧植民地宗主国フランス政府が軍事支援を行っています。大体五千人ぐらいの兵士を投入してこのようないい治安維持活動を行つて来たのですが、端から見るとやはり対症療法になつてしまつていて、力で力をねじ伏せようとしていてあまり効果が見られません。実際に外務省の危険度リスクマップの表示を見ますと、私が関わつてからずっと悪化し続けておりまして、今現在、シリア、アフガニスタンと同じレベル三、四ぐらいの、外国人が普通はアクセスできないようなレベルになつてしまつています。

ただ、現地に行つて問題の根本を見ますと、こういつた紛争が起きる所の根本には自然資源の劣化ですか、その奪い合い、そしてマネジメントの欠落があると思います。なので、有事の支援というものは緊急で軍隊を派遣するとか、食料を投下するしかないのですが、昭憲皇太后基金のように平時の支援というのを考えたときに、協生農法のようにその紛争の根本にある貧困とか貧栄養といったものにアプローチすることが必要です。そのためには、それを生み出している土地利用から目線を変えて、より自然资源が豊かな生態系を、人々の多面的な価値観を含めてつくるついくことが、長期的に重要になつていくと思つ

ています。

す。

こういつたものは実は通常の資本主義的なイノベーションとか、企業単位の利益というものをクライティアにしてやつていつてもなかなか形成できません。経済学の中では例えば社会的共通資本とか、コモンズとか、共有財などと言われておりますけども、市場原理に任せていたのではないかなか立ち上がりません。しかし、金員がいろんなコントリビューションをして、共同のアーチを築くことで、社会も生態系もより良いものにしていくことができる。そういう道筋があると思っています。私はプライベートセクターの科学者としてのバックグラウンドが強いのですが、今日はそういう視点からお話しできればと思います。

伊藤 ありがとうございました。赤茶けた土から、青々とした緑が生まれて、いろんな農作物が取れるという、想像を超える土地の豊かさが実現することに本当に驚きました。しかし、水はどうされているのか、その土作りはどうしているのか、素朴にちょっと疑問に思つてしまつたのですが、その辺りはどうなのでしょうか。

船橋 砂漠化でよく誤解されているのは、砂漠に水がないということです。もちろん水がないもう完全にカラカラの砂漠もあるのですが、それはごく一部でして、例えば朝だけ霧が出るとか、もしくは雨が降るけれども、生態系が

ないので留められない。日本でいうと砂浜を想像していただけると分かるとおり、そこは雨が降つてもすぐ乾くじゃないですか。そういう感じなんです。地表に生態系があれば実は全く違うシナリオが発展していくんです。その見事な例がこの明治神宮なわけです。

そういうふたものを自然発生に任せていくと非常に効率が悪いんです。拡張生態系はもちろん、自然の推移に任せる部分が大部分なのですが、その初期値として最初にきちんと崩れないアーチというものを形成してやるとその後うまくいくんです。砂漠化してしまったところというのは、少しの草や木が生えても単独では弱いのですぐにそれが死んでしまって、そういうふたアーチが形成できない悪循環に陥ります。日本に住んでいると畑をいくら耕して破壊してもすぐ雑草が生えてきますので、そのイメージがわれわれの原風景にないのですが、実は世界の大部分、陸地の三分の一ぐらいはそういう不適切なマネジメントを行うと砂漠化してすぐには戻らないというような状況がこの地球の現実です。

伊藤 なるほど。それでは、土の中にいるいろんな虫とか、そういうものも役に立つて頑張ってくれているからこそ土ができる、緑ができる、そして食べ物も収穫できる、こういうことでしょうか。

今泉 すみません。協生農法の拡張生態系をつくることは、ブルキナファソだけじゃなくて、鳥取でもとおっしゃっていましたけれども、科学的には今、どこでも可能だということなのでしょうか。

船橋 はい。拡張生態系が基づいているのは、生態系がどうやって海から陸に進化してきたかというメカニズムなんですね。なので、今陸上生態系であふれているじゃないですか。でも、月とか火星ってそれがないですよね。地球上はそういう生態系が発生した以上、もちろん天文学的にサハラの北部とか、かなり長い期間乾燥している地点もあるので、そういう所は難しいかもしれません。人為的な砂漠化が起きてしまった所を速やかに、人の手を入れて回復するには非常に有効ではないかなと思っています。そういうふた場所全部で試したわけでは無いのですが、ブルキナファソで試して、マリで試して、今トーゴで試していて、あとは日本の各地でも家庭菜園で実践されている方が千人ぐらいいらっしゃいます。先ほどお伝えしたとおり、鳥取砂丘で実証実験も行つたりしていまますので、それらの状況証拠を勘案すると、かなり広い領域で通用するのではないかとう憶測は立っています。

今泉 では、船橋さんの見通しからすると、今日の南スードンは果物の木を植えるという話でしたけれども、そこで

船橋 はい。やはり虫とか動物とか、われわれ人間も動物ですけれども、それがいるということは生態系全体にとってポジティブな意味があると思います。ただ、その部分系だけを取り出して、例えば米だけを栽培したいというようにモノカルチャーをやるとやはり虫は邪魔になってしまいます。それはもうミクロに見るか、マクロに見るかの違いであつて、こういった砂漠化の危機にひんしている所ではマクロに見たほうが生活基盤として有用でしようつていうのが総合的になります。

伊藤 なるほど。アフリカだけではなく、このような農法というのは、日本でも必要なのではないかと思つぐらい、本当に未来を感じますね。

船橋 はい。実際ブルキナファソの砂漠でやつてみたのですが、理論的に予測したとおり、いや少し予測を超えるくらいうまくいきました。ただ、問題は現地の治安なんですね。それに、日本でも同じようにできるのかなと思つて鳥取砂丘で実験したら、やはりうまくいきました。

伊藤 うまくいったんですね。

船橋 はい。わざわざ海から砂を担いで、砂だけの畝を作つてやつたら非常に面白い結果になりました。農業の常識も変わっていくと思います。

伊藤 なるほど。どうぞ、今泉さん。

も協生農法を導入するのが良いと思われましたか。

船橋 南スードンの話は非常に面白くて、もちろんブルキナファソにもマンゴー等がたくさんあります。しかし、やはり木だけではなく、そのような生態系を全面的に捉えるということが重要ではないかと思つています。砂漠緑化というと皆さんには植林っていうのがまず第一に浮かぶと思うのですが、植林っていうのは生態系を構築する手段、数ある手段の中の一つにすぎません。場所によつては植林したおかげで地下水を吸い上げてしまい、植林した木と全部共倒れになつて逆に砂漠化を加速させたという例も実はあります。そういうときどうするかというと、実は家畜のマネジメントのほうが重要であつたりするんです。木の前に草原を再生するという取り組みが南アフリカでつたのですが、そこでは植林ではなくて、既にいる野生動物、ゾウとかライオンと追い掛けっこしながら家畜をどう移動させるかという、家畜の移動の密度を利用し、乾季と雨季をうまく使い分けて草原を再生するという活動がありました。なので、生態系と一口に言つても非常に多様ですので、果樹を植樹するということも入り口としてはありますけれども、家畜もあるし、虫もあるし、コケもあるし、人間もあると

伊藤 なるほど。まだまだ興味は尽きないのですが、実は

赤十字も地球温暖化、気候変動ということに関してはいろいろな活動をされていますので、辻田さん、少しその内容を教えていただけますでしょうか。

辻田 ありがとうございます。今、船橋さんからお話をあつた地球の生態系というのも一定の温度や気候の流れの中でバランスを保っていると思うのですが、今はそれが脅かされています。

気候変動といいますと、まず思い浮かぶのが気温の上昇です。気温の上昇が気象現象に変化をもたらし、その結果、我々の生活や生態系に様々な影響が出てくるんですね。図2は過去六十年間の災害の数を示したもの。一九六〇年からの推移を見ますと特に気象に関係する災害、例えば洪水や暴風雨、あるいは干ばつなどが年々増えています。われわれの肌感覚としても、最近テレビで「百年に一度の豪雨です」といったニュースが毎年のように流れています。何がだまされているような気分になってしまいます。

伊藤 そうですね。毎年ですもんね。

辻田 しかし、これが事実です。実際に、二〇一九年に発生した自然灾害を調べますと、七七%がいわゆる気候や気象に関係した災害でした。さらに、被災者の数で見ますと、実際に九七%が気候・気象災害の被災者。つまりこれだけ気象災害が、人道的な危機につながっていることがお分かりしています。

次々ドミノ倒し的に様々な人道危機を起こしていく、これが気候変動の影響なのです。

赤十字は昨年、「人道団体のための気候・環境憲章」という宣言を策定しました。ここで私たちが最も大事にしていることは、温暖化は地球上で平等に、あるいは同じように起きるわけですが、その影響というのは人や地域によって違います。結果的に社会的に弱い立場に置かれた、あるいは貧しい国の人々が真っ先にこの影響を受けます。そこで、最も弱い立場に置かれた人々のことを考えて、この現象に取り組んでいく必要があることを、赤十字では憲章という形でまとめました。これは世界中の赤十字・赤新月社、あるいは様々な国連機関も署名をしており、日赤も署名をしています。

気候変動への関わり方には、大きく二つのアプローチがあります。一つは緩和策といって、皆様もよくお聞きになるいわゆる温暖化をもたらす温室効果ガス、二酸化炭素、こういったものを減らしていく。あるいは植林などもありますが、これは将来これ以上温度が上がつていかないようになります。将来のリスクを少しでも下げていくといった、言わば将来に向けた取り組みです。もう一つ忘れてはいけないのが適応策です。これは今まさに危機を迎えており、つまり影響を受けている人たちに対しても支援をしていくよ

いたがける
と思います。

今、災害

の増加と甚

大化、激化

を挙げまし

たけども、

これ以外に

も様々な影

響がありま

す。例えば

海面上昇に

よって陸地

の住める場

所が減つて

いく。あるいは農作物の生産性が悪化していく。漁業にも影響が出ていく。その結果、水や食糧がどんどん不足していく。また、熱中症の増加も明らかな傾向が見られます。さらに蚊が媒介する感染症のリスクも増加していきます。その結果、これまで農業に従事していた人々がそこに住めなくなりて、他の地域に移動する、いわゆる人口移動によって難民、避難民が発生する。このように一つの現象が

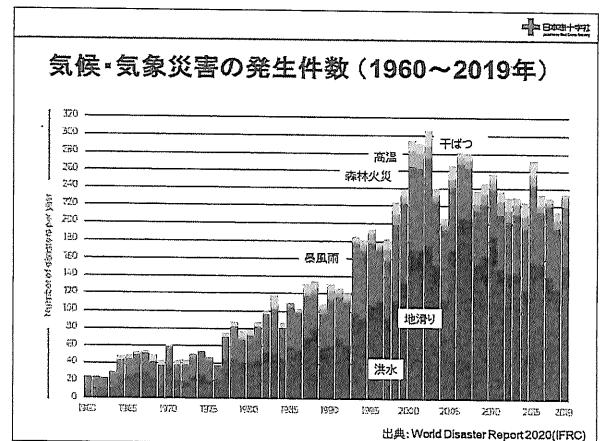


図2 過去60年の災害発生件数

島国で津波や豪雨、台風などが年々増えています。そこで村のボランティアが、まず防災チームを結成して、災害のみ影響を受けている人たちに対して支援をしていく、赤十字も地球温暖化、気候変動ということに関してはいろいろな活動をされていますので、辻田さん、少しその内容を教えていただけますでしょうか。

最後はインドネシアのケースですが、ここは日本と似たことで、山肌がどんどん崩れていきます。そこで、赤十字がまず水を確保できるようにして、家庭菜園で身近な所から少しずつ緑化を進めていきます。また、乾燥させたバナナの皮などから作った燃料を普及することで、これ以上まきを使わず、木を切らなくて済むように森を守つていくような支援も行っています。

最後はインドネシアのケースですが、ここは日本と似たものが適応策です。これは今まさに危機を迎えており、つまり影響を受けている人たちに対して支援をしていく、赤十字も地球温暖化、気候変動ということに関してはいろいろな活動をされていますので、辻田さん、少しその内容を教えていただけますでしょうか。

ときにどこに逃げれば良いかを記した避難マップを作成したり、情報が得られず逃げ遅れてしまふリスクのある耳が

聞こえない方などに活動に参加していただき、様々な立場の方の声を反映して、村人たちがみんなで力を合わせて災害に立ち向かっていく。このような支援も行っています。

気候変動というものは一筋縄で解決しない課題ですが、ある意味地球上の誰しもが直面している共通課題として、

みんなで取り組んでいかなくてはなりません。世界中が一つになつて取り組むべき課題であると思います。

伊藤 第一部でも人道支援のこれまでの歴史というのが、まさにその時代を表すというようなことをおっしゃつていましたけれども、今起きている危機に対しても何かをするだけというよりも、さらに根本的な原因からアプローチしていく必要がある。気候変動が貧困につながり、食糧不足にもつながる。そして、先ほどの紛争にもつながるというような、様々な問題の原因になつていています。そこを何とか世界でアプローチしていくことによって解決していくことを取り組みなんだと思いました。

大使、ハンガリーでもやはり気候変動の問題というのを大きく捉えられていますよね。

パラノビチ 確かにハンガリーでも問題になつています。私の子どもの頃の気候と今の気候を比べると、やはり最近

は極端な天候が多いように感じます。

以前は、ハンガリーでも季節がしつかり四つに分かれていったと思っていたのですが、クリスマスにハンガリーに戻つた際には、気温が二十度以上で春と夏の間のような気候でした。しかし、今週末は四月に入つたのに雪が降るかもしれないという天気予報がなされています。

農業の影響に関しては、プラスとマイナスの影響があると思います。プラスとして捉えると、ハンガリーではもともと栽培できない果物や野菜も少し取れるようになります。また、ハンガリーもワインの生産国ですので、ブルゴーニュの品種もかなり変わつてくると思います。

伊藤 なるほど。プラスになるところもあれば、マイナスになるところもある。しかし、やはりそのままではいけないということですね。それ故に、貧困地帯ではそれに対応できず、マイナスになる要素が大きいというように感じます。

ここからは、私たち日本人が未来に向けて、また一人の人間として何ができるのかというようなお話を聞いていきたいと思います。先ほど明治神宮の森が百年前は原野で

あつた。にもかかわらず、今はこれだけの森になつていているというお話がありましたが、私たち日本人は、自然と共生して生きているという価値観もあるかと思います。何かそういう考え方やアプローチが世界に生かせていくような気がします。そこで、大使にお伺いしていきたいと思いますが、日本のポテンシャル、また人道支援等に関する日本への期待、どのようなものを求めていらっしゃるのかというところを少しお聞かせいただけますか。

パラノビチ はい、ありがとうございます。本日の登壇をお引き受けしたときには、ハンガリーにとって今日のテーマがこんなにタイムリーになると一切思つていませんでした。ご存じのようにハンガリーと国境を接しているウクライナでは戦争が始まり、ハンガリーでも人道危機に応えるために、これまで最大規模の人道支援活動を行っています。すべての国境検問所を開放して、避難民を受入れています。また、第三国出身の避難民用に人道回廊を開きました。三月末まで約六十万人の避難民がハンガリーに入り、その大部分はウクライナ国籍でした。

人道支援活動は、ハンガリーと国際支援の団体、あとハンガリー赤十字社が協力して行っています。その中で一番中心的なのは、ハンガリー政府と六つの団体です。その中に赤十字社も入っているのですが、その六つを束ねた組織



図3 ハンガリー赤十字社の支援の様子

「カルパティア・ルテニアの橋」が中心となり、支援活動を組織的に行つています。その組織は個人からの募金も受け付けていて、日本からもこちらを通して募金が可能になつています。ちなみに駐日ハンガリー大使館にも数多くの問い合わせが入つてきており、日本の方々の協力したいという気持ちを非常によく感じています。

人道支援組織とともに、ハンガリーはウクライナに向け、数千万ユーロを支援してきました。祖国を離れた避難民にも、ウクライナ国内で避難している市民にも医薬品・食料・水・衛生用品・育児用品など、必要な物資を提供しています。他にも、ハンガリーは五千トンの救援物資や、電気や燃料といったエネルギーもウクライナに届けています。図3でお見せしているハンガリー赤十字社も先ほどお話ししたとおり、「カルパティア・ルテニアの橋」に加わつ

ていて、ハンガリーの首都のブダペストだけではなく、国境付近で集中的な活動を行っています。国境に近いローニャ市に支援センターを設置して、二十四時間の医療ケア、食料供給、情報提供、心のケア、そして離れてしまった家族の捜索活動を行うとともに、この支援センターとは別に倉庫も設けました。その倉庫で支援物資を保管・仕分けすることができました。そして、必要に応じて国境を越えてウクライナのカルパティア地方に届けることができます。更に、今回の危機で届いた、イタリアやドイツなど外国から保存食・水・衛生用品なども集中的に管理するなどによりて必要に応じた対応もできています。さらに、ハンガリー政府と赤十字国際委員会は、ウクライナ国境に近いデブレツエン市に五千平方メートルのロジスティックセンターも設置しました。

先ほど申し上げたとおり日本からの援助は心温まるものです。日本政府が三月十一日に一億ドルの支援を赤十字国際委員会など幾つかの団体と日本のNGOを通じて行う」とが決まって、さらに一週間前の三月二十五日にも一億ドルの追加支援を行うという話が出てきました。これからにも非常に感謝しております。

先ほど申し上げたとおり、ハンガリー大使館にも個人、法人を問わず、多くの電話を頂き、物資も届いていて、日

ないのかなと思いました。

次は南スーザンでの支援についてお聞きしたいと思いますが、松波さん、人類学者として今後の支援の在り方にについてどうあるべきなのか、お聞かせいただけますでしょうか。

松波　はい。支援の関係者が集まる機会であるからこそ、支援の難しさなどを共有しておきたいと思います。

初めにまず一つ本を紹介するのですが、ダンビサ・モヨというザンビア出身のエコノミストが書いた本です。彼女の主張は、この本のタイトルのとおりで、「援助じゃアフリカは発展しない」（東洋経済新報社、二〇一〇年）とどうものです。

彼女の主張全てを紹介する時間はありませんが、援助というものが現地にとって必ずしもポジティブな側面だけを持つわけではないという話をします。例えば、援助によって現地でモラルハザードが起きるとこうことを紹介しています。援助といふことでは、国際社会のいろいろな団体がこのバスクットに向かつてお金を投げるわけです。そうするとどんなでもないお金が集まる。それを目の前にして被援助国の政治家や役人の間でモラルハザードが起きる。それを具体的な事例を挙げて指摘して、結局本当に援助が必要な人に届いてないという現状を指摘した。

本の方々の一生懸命手伝おう、協力しようという優しい気持ちをよく感じています。

あと最近、日本のニュースでも出てくるのですが、紛争地や災害などの支援経験がある日本の医療関係のNPO法人AMDA、英語で言うAssociation of Medical Doctors of Asia、あとTICO、徳島県のTokushima International Cooperation からの医師や看護師、医療関係の専門家がハンガリーに派遣され、避難民の医療など、医療支援の協力をされています。

私は東日本大震災のときも日本にいたので、少しその体験をお話ししたいのですが、震災後の日本国民と社会の協力、そして結束が非常に素晴らしいと感じました。もちろん喧嘩などが全くなく、みんなが助けあって復興という一つの目的に対して、一緒に活動できていました。それはなかなか海外では見ることができないので、そのような強い協力と活動を日本から学び、災害が起きた場所に伝えられたらいいのにと思いました。

伊藤　なるほど。日本は災害大国でもあって、身近に被害に遭われている方がいらっしゃいますから、我が事として共感をしながら支援をしていくというようなことが、もししかしたら今お話があつたとおり日本人の強みであり、それは今後の国際的な人道支援にも活かしていかなければいけ

本の方々の一生懸命手伝おう、協力しようという優しい気持ちをよく感じています。
多くの人に読まれた著作ですが、批判としてはやはり、読むと分かるのですが、全てのアフリカの問題とどうものを援助に還元して議論してしまっているので、そこは行きすぎだらうとこうような気もするのですが、ただ、それだからといってやつぱりすべてを切り捨てるとはできないと思います。特に援助関係者は彼女の主張に一度は耳を貸すべきではないかというように感じています。

もう一つ、二冊目はビルディ・ジョーンソンとこう国連の南スーザンのミッションのトップを務めた方ですけれども、彼女が退職した後に書いた本ですね。『South Sudan: The Untold Story from Independence to Civil War』(IB Tauris & Co. Ltd, 2016)とこう本です。

彼女が南スーザン政府の役人の部屋に行つた際に、部屋の片隅にキャッシュが詰められた山積みの段ボール箱を日撃したことが書かれています。本当にもう無造作に何箱も

ぱーっと積んであるんだと。そのお金って一体何が原資なんだ。おそらく公金であるはずだが、適切なかたちで管理がなされていないひどい状況を目の当たりにしたというわけです。

実際に二〇一六年以降、南スーザンで約三十八億円が政治家や政府高官によって横領されたという報道もあります。その原資は一体何かと考えると、やはり援助というものの認識や実践のあり方を考える必要があるのかなどということを感じるわけです。

南スーザンが独立した際に、それを祝福して南スーザンの広げたバスケットの中に国際社会はたくさんお金を投げ入れました。そういう援助のお金が現地で適切に管理されているとはやはり言い切れないように感じています。

それを踏まえて今日のテーマ「私たちができることは何か」を考えると、一円でも多く寄付することはやはり言えないわけです。では、何ができるかと言うと、やっぱり自分たちの援助が現地社会にどういうインパクトを与えるかというのをきちんと認識することであると、まずそこから始めるべきではないかというふうに考えます。なので、まず初めにアフリカの人々が問題をつくって、その問題から分断された立場の「私たち」が、それを支援していくというような認識を脱却することが必要であると思います。

私たちも、多かれ少なかれ現地の問題をつくる一員である。その認識を共有することが大切であると考えます。そもそも何で援助が必要なのかというところまで考えるト、「私たち」が進んでいるから、遅れているアフリカを援助しているというわけではないはずです。「私たち」の社会がより進歩していく、彼らの社会が未熟である。未熟な社会が問題をつくるから進歩している私たちが助けるんだという社会進化論的、父権主義的な論理に陥ってはいけないと思います。

では、どういう関係を結ぶべきか。援助というのは進んでいるからとか劣っているからとか、そういう認識に基づいて行われる行為ではない。当たり前のことかもしれないが、困っているから助けるんだと。

東日本大震災のとき、アフリカ諸国が日本に支援してくれたことがありました。それってやっぱり私たちが困ったから彼らは支援してくれたわけですね。日本とアフリカの社会の関係において、いろんな差異はあるけれども、それは優劣に還元するものではなく、横並びとして捉えられるべきものであると思います。横並びの立場から困った人を助ける、そういう援助の立場性の認識について考えてみるとこと、これが今私たちにできる」となのかなという私の考えです。以上です。

伊藤　ありがとうございます。まさに横並びという認識、私たちもその活動を通して何か得られるものはないだらうかという姿勢も本当に大事であるという気がいたしました。次に、船橋さんも民間の立場で地球全体の課題、ひいてはそういう貧困地帯で困っている方々を助けるということをなさつてているかと思うのですが、そのお立場から支援の在り方というのをきちんと認識することであると、まずそこから始めるべきではないかというふうに考えます。なので、まず初めにアフリカの人々が問題をつくって、その問題から分断された立場の「私たち」が、それを支援していくというような認識を脱却することが必要であると思います。

船橋　その本は私も拝読しました。もちろん一〇〇%賛成というわけにはいかないのでですが、とても重要な論点を挙げていると思います。私が見た中でもモラルハザードの例はあります。ある国家プロジェクトに協生農法の導入要請が来たので、現地のNGOから派遣して十日間の教育プログラムを実施しました。それでうまくいくのかといふと、必ずしもそうではありません。国の予算があつて、人もいて、土地もあるのにモラルハザードが起きるんです。端的に言うと、プロジェクトの統括者がうまくプロジェクトをやつしているという見栄を張るためにいろんな人を利用しようというメンタリティになつていてうまく回りません。ここは難しいところで、お金があれば、人がいれば、土地があればできるわけではなくて、その間がどのようなコンテクストでつながっているかが重要です。

全く逆の例で、例えば我々はブルキナファソで当初計画

しましたが、テロリストが本当に農園のすぐそばまで来て、実際に襲撃されたんです。なので組織としては撤退したのですが、残つた現地の方々も当然います。一ヶ月ぐらい前に現地の情報を得たところによると、農民たちが以前やつていた協生農法の実践地を受け継いで、危険地帯の中で農家同士が集まって一緒に協生農法をやっていくという活動が、自主的に立ち上がっていっているといふんですね。つまり、片やお金も人も土地も十分にある安全な国家プロジェクトはモラルハザードを起こして、片や一切の国際的人道的支援もない危機的状況にもかかわらず、人々が自らの手で立ち上がり継続しているという事態が起きているわけです。アフリカは、このような状況の間を右往左往してきた歴史があると思います。

経営的な立場からいいますと、こういつた支援というのは最初のワンステップの仕組みをつくる上では有効になりますが、その後の成長戦略というものがないとどうしても発展していかないんです。もちろん成長という環境負荷を生むリスクと隣り合わせなので、何をもつて成長というかには非常に気を付けるべきですが、少なくともテクノロジーだけではなく、生態系を構築することによって環境を住みやすいものにしていく。もしくは外部資源に依存せず食料を生産したり、カーボン固定をしていく方向

性が基盤にあるような取り組みであるのなら、既存の砂漠化やパンデミック、紛争を助長するような技術ベースの外部支援に取つて代わるように急成長すべきだと私は思っています。そういう理念の下にSynecco社を創業しております。

では、その指數成長をどうやるかというと、どこかで倍々ゲームの仕組みをつくる訳です。具体的に言うと、最初に支援して、十人の人が育ちました。十人の人はそれぞれ十人の人に教えると百人になります。百人の人がそれぞれ十人の人に教えると千人になるというふうに、これを指数成長といいます。そういう仕組みがきちんと成立するとインパクトが出てきます。アフリカの場合はそこがなかなかかデザインしづらいというところがあるかなと思います。

あと地球と人間社会の共生みたいなことを言ったときに、それは部分と全体の関係なので、シナジーもコンフリクトもあるんですね。部分最適と全体最適というのは、当然両立する方向もありますが、うっかり間違うとやはりけんかしてしまいます。部分のために全体を犠牲にしてしまう。人間でいえば個人のエゴのために集団を犠牲にする。農業でいえば単一の作物のために生態系を犠牲にする。国際関係では一部の資本主義社会のために外部負荷を転嫁する植民地や経済格差をつくる圧力が生じる。

てやるとか、持てる者が持てない者にあげるということではなく、今日は困っている人がいるから手を差し伸べる。しかし、明日は自分が助けられるかもしれないということだと思います。私たちは東日本大震災が発生した際、世界中から助けられる経験をしました。先ほど大西さんのプレゼンテーションで紹介されました。昭憲皇太后的御歌の中にも「たすけあひ」という言葉がありました。私たち一人一人がお互いに助け合って生きる、そして、社会全体が助け合っていく、これが社会課題解決への第一歩ではないかと思います。

もう一つですが、日本は戦後、めざましい経済成長を遂げて、技術大国になり、経済大国になりました。ところが最近元気がないということで、インターネット上でも「もうこの先日本はどうなつちやうのだらう」という、否定的な見解が目立ちます。私は、これから日本は「人道大国」を目指せないかと考えます。昭憲皇太后基金のような素晴らしい歴史があるので、経済大国の次は人道大国として世界中のモデルになるような、そんな国になつていけると良いと願っています。以上です。

伊藤 辻田さん、どうもありがとうございました。では、松波さん。

松波 私は先ほど十分話しましたので、大丈夫です。

そういうたものを根本的に変えていくときに、経済つて結局人間がこれ幾らという値段をお互いに合意して決めるわけですから、主観的なものなんですね。それに対してその負荷がどこにいくかなど、自分たちの社会以外のところ、もしくは生態系にいくんです。そういうた資本主義の仕組みをアップデートするときに、自然資本とか自然資源の再生産まで含める形で、ライフサイクルというのを定義しなければなりません。今はこれだけ高度情報化社会になりましたが、それがまだ不十分なんです。人間社会が持続可能な豊かさを享受する上で、具体的にどう生物多様性と共に発展していくかをきちんと人間の言葉として扱えるようにしていくことが、人間社会と地球規模の課題をつなげる上で非常にクリティカルな設定になると思っています。

伊藤 ありがとうございます。まだまだお話を続けたいところですが、お時間もまいりましたので、ぜひ最後に一言ずつこのシンポジウムを通して皆さんにお伝えしたいこと、そして、私たち一人一人が何ができるのかという視点でお話を伺つて終わりにしたいと思います。それでは辻田さんからお願ひします。

辻田 そうですね。私は大きく二つのことが頭に浮かんでいます。一つは助け合いです。今、松波先生からお話をありましたが、援助というものは、何か強い者が弱い者にし

伊藤 ありがとうございます。では、大使、お願ひします。バラノビチ 先ほど申し上げたとおり、有事の際には人と人との協力、即時に対応するためのノウハウが非常に大切になると思っています。どうすれば人々はそれらに関して学ぶことができるのか。それは間違いなく教育です。先ほど皆さん方が言られたように、今日強い社会が明日は弱くなるかもしれません。逆のパターンももちろんあります。そして、毎日何らかの災害が起こる可能性があります。なので、支援や開発、あと活動に対しても継続した教育が非常に大切であると感じました。

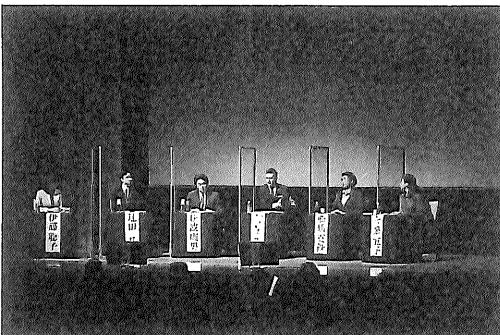
伊藤 どうもありがとうございました。では、船橋さん。船橋 一律正解を示すのは難しいのですが、逆にこの方向は避けるべきだというお話を最後にします。具体的には三つの方向性を避けるべきだと思っています。

一つ目は、環境ファシズム、少し前の言葉では環境ファシズムです。これは気候変動なり、生物多様性の喪失に対する対策を体制側が強権的に発動することです。一見良い事のようですが、環境とか生物多様性というのは文字通り多様性、そこから立ち上がる機能性が重要なんです。それにはいろんな人々のシナジーとか創造性が非常に重要です。ソニーグループはそういうものをとても大切にしています。なので、そういうたものを抑圧してしまう環境

ファシズムというのは、避けるべき方向性だと思います。これは体制側ですが、個人側は何かというと、私は環境マッチョと呼んでいます。環境マッチョというのは、典型的には私は自然と共に共生して生きていて、免疫力も高いから医者にはかからないみたいなことを言う人です。これは、もちろん有効な局面というのもあります、今まで色々な災害や、弱者と如何に連携するかなど、社会的な対話を通じて構築されてきた諸制度に対して、個人の視点に偏った不合理な批判を向けてしまってます。私なんか特に環境マッチョの傾向が強いのですが、そういうものも行きすぎは良くないと思っています。

環境ファシズム、環境マッチョと来て、三つ目に避けるべきは環境ファッショニズムです。典型的にはグリーンウォッショです。もう大喜利みたいに何かお題を与えて、それでグリーンウォッショしてくださいというと、今何でもできてしまつたんですね。私が今日着てるのはちょっと自然にいい素材でして、洗うとマイクロプラスチックが三〇%減りますというと、環境ファッショニズムになるんです。これはそもそも負荷を生んでいるものを僅かに削減しただけで環境にいいという論理にすり替えてるのです。もともと環境負荷を生んでいるのならそれをなくすほうが断然良い訳ですから、もつといふと生態系をつくるほうがいいわけですか

第2部 パネルトークの様子



昭憲皇后基金が成立されてからもう百年が経つのですが、明治の時代に比べて、今は世界が身近になって、ダイレクトに世界の状況が私たちの生活や人生にも影響を与える時代になっていると思います。気候変動の問題についても私たちの生じさせた影響がアフリカにも伝わり、そして、アフリカで採れなくなる作物が私たちの生活にも影響を与えてる。そして、今紛争中のロシアは私たち日本の隣国でもあります。すべてにおいて、本当に身近な問題として捉えなくてはいけないということだと思います。また、支援については、お金がどのようにして使われているのかといふことをしっかりと見なければなりませんし、もつと私たち一人一人が視野を広く持つて、世界中の人たちとともに生きていく、お互いに助け合えるような関係をもつと構築していくことが必要だという

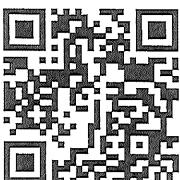
ことを、今日あらためて実感させていただきました。皆さん、本当に短い時間ではございましたが、どうもありがとうございました。

【主催者からの追記】

「代々木の杜で考える平和・人道支援・SDGs」と題するシンポジウムは、様々な分野、また地球的視点からご発言頂くパネルトークへと展開しました。この複雑多岐にわたる問題を、わかりやすいイラストでまとめるグラフィックレコーディングとして、パネル直後に赤十字ボランティアの田中友美乃さんが表現し、会場のみなさんと共に振り返りました。「次頁参照」

それぞれがリンクしながら一枚に収められたイラストを見て、改めて、私たちを含むすべての生態系が地球全体で繋がっていることを認識することができました。

尚、このシンポジウムを収録した動画は、明治神宮国際神道文化研究所のホームページ内「研究会案内と実績」(<https://www.meijingu.or.jp/mininfo.php>)で公開しています。



研究会案内と実績へ

ら、そういった本来のコンテキストを無視して、負荷を少し削減する部分的な緩衝策、それをもつて環境に良いとする」ことをやりすぎると、結局は総合的に環境負荷を生んでしまつてます。これが環境ファシズムです。

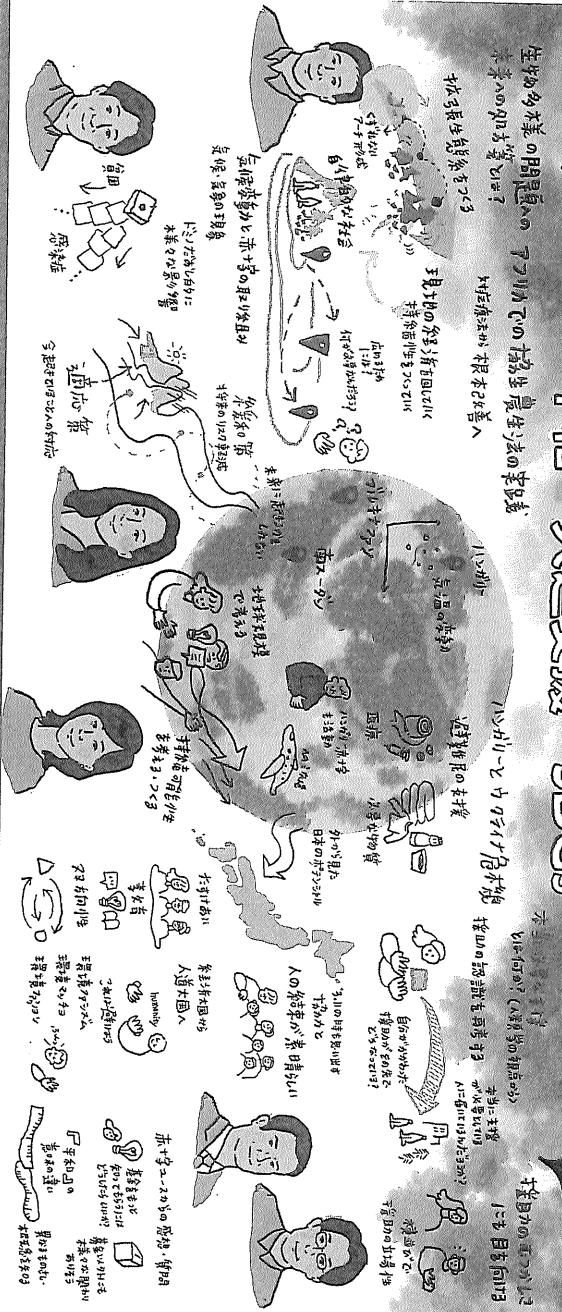
なので、私自身の自戒の意味も込めて、環境ファシズム、環境マッチョ、環境ファッショニズムではない中道は何かというのを常に考えています。

伊藤 どうもありがとうございました。では、今泉さん。今泉 主催者の一人としてここに同席させていただき実感したことは、昭憲皇后基金の恵みというのは、一方通行ではなくて、双方向であるということです。私たちが募金をして向こうの方々を支援するだけではなくて、今日は南スーダンや世界の気候変動について知りましたが、まさに世界で今どのような人々がどんな困難に直面しているかということを基金が私たちに教えてくれているという、こういう何か双方向性がとても大切だなと思いました。今私ができることというのは、今回のシンポジウムのように四月十一日に配当先が決まつたら、今年の配当先の現状を学ぶというような未来への取り組みを継続していくことが、私にとってのできることではないかなということを今日強く思いました。本当にありがとうございました。伊藤 ありがとうございました。

代々木の社で考える 平和・人道支援・SDGs

セイエイ社規模の甲斐源の解説のため
アーティストが描いた絵

人道支援の分野でつながる
これから日本の社会に貢献していくのか
日本人のやうにさがでまことにかかわらんか



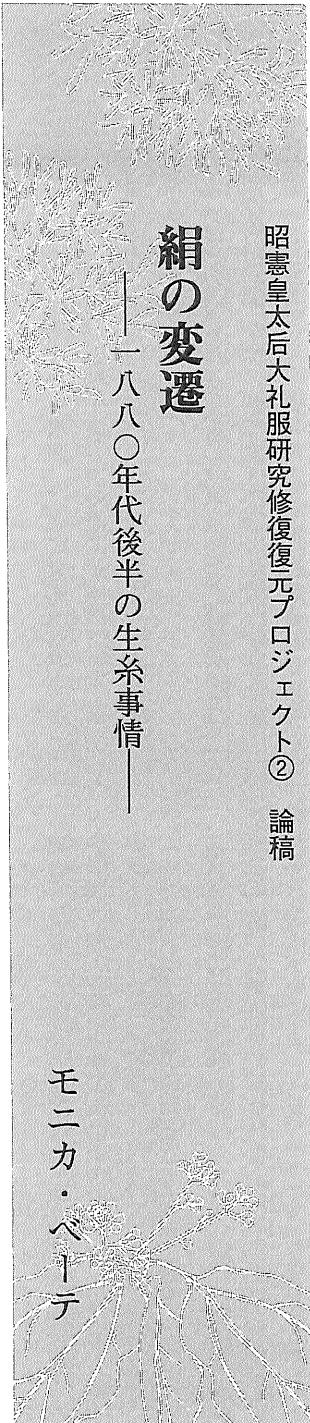
制作・田中友美乃(赤十字ボランティア)

昭憲皇太后大礼服研究修復復元プロジェクト② 論稿

絹の変遷

——一八八〇年代後半の生糸事情——

モニカ・ベーテ



はじめに

明治の中頃、一八八〇年代後半、皇后の服装は、和装から洋装へと大変革の時を迎えた。洋装の最も格式ある正装は、新年に外国の賓客や高官を迎える際に着用した大礼服である。皇后は、ドイツのベルリンに発注したトレイン、ボディス、スカート等をお召しになり、一八八七年（明治二十）の新年、初めて洋装の大礼服で人々の前に立たれた。宮内庁書陵部の記録によれば、翌年には皇后のため新たな大礼服が発注され、日本国内で縫製されたことが分かつている。一八八七年一月に昭憲皇太后がお出しになつた「思召書」には、洋装に日本産の生地を推奨することで国内織維産業の活性化を図りたいという願いが込められていた。

一八〇年代後半に皇后が着用した大礼服で現存するのは一点のみで、一九〇九年に大聖寺門跡に下賜されている。今に至るまで大事に保存されてきたが経年の劣化が激しいため、本プロジェクトでは、この大礼服の研究修復復元に取り組んでいる。修復にあたっては、生地に使われた絹糸の特徴を詳しく調べる必要がある。そこで、国産か外国製かを判別するため、一八八〇年代後半に日本でどのような生糸が生産されていたのか調べることにした。当該時期は資料に乏しいが、当時の絹糸の事情はかなり複雑だった。

大聖寺の大礼服が製作された時期は、明治政府が近代化に向けて西洋の技術を導入し、製糸業の振興に力を注ぎはじめた七〇年代と、日本が生糸の貿易高で世界のトップに立つた九〇年代後半から二十世紀はじめの時期のちょうど